

優秀賞

特別な事なんかじゃないよ

聖園女学院中学校 3年 石坂 蒼末

「嬉しいけど普通に接して欲しいな」

幼馴染の友人は小学生の時、突然の病気の影響で右半身に麻痺が残り、現在は自由に動くほぼ左半身だけで生活しています。可哀想だな、一緒にいる時は私が動かない右の役目を担いどんな時も手を差し伸べる事で助かるだろうと思いい、一緒にいる時は常に、友人を中心に行動していました。

そしてそれは、突然のことでした。数人の友人と放課後に遊んでいた時の友人の言葉。少しでも力になればらと思いい、行ってきた私にとってその言葉は、心に突き刺さりました。何でなんだろう、何か傷つけるような事を言ってしまったのかな。冷静になって考えてみました。もし私が同じ立場だったら。遊びも生活も今まで通り普通にしたいし、ハンディキャップを背負ってる事以外は今までの私となんら変わりありません。それなのに一目置かれた、特別な存在となってしまうたら、冷たいガラスが一枚壁を作ってしまった、今までのように心から笑えないし、話せない。「足が悪いから車椅子に乗る」のは「目が悪いから眼鏡をかける」というのと同じこと。お年寄りや妊婦さんが困っていたら声をかける事と同じである。特別な事ではない。

今年に控えた、二〇二〇オリンピック・パラリンピックに向け、迎える側のホスト国、日本の私達がハンディキャップを持った人達への理解を深めることが重要だなと感じました。障がい者マークの意味を理解したり、ハンディキャップを持った人達が普通に皆と同じ行動ができるよう、バリアフリーの道やトイレ等、スマートに案内出来る自分でいたいと思いました。

私はこのほろ苦い経験によって、手を差し伸べる事だけが優しさでは無いこと、相手の立場に立って考える大切さを改めて学びました。気付きを与えてくれた友人に感謝。

これからも切磋琢磨する仲間だよ。